
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 396 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2017.02.02 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

*****発行部数 975 部*****

▽2月4日(土)第157回 定例研究会を行ないます!

今回のテーマは「自然災害と水土の文化」です。

水害や地震といった災害は単なる自然現象ではありません。
社会や技術、そして文化のありようと深くかかわっています。

自然災害が頻発するなか、水と土とは私たちにとって何なのか。
自然と人間との関係、そして技術論、文化論の視点から問い直す研究会です。

会員外の方の参加もお待ちしております!

1、日時:2017年2月4日(土)13:15~17:00

2、研究会会場:NTC コンサルタンツ(株) 会議室

東京都中野区本町1丁目32番2号ハーモニータワー20階

3、参加費:500円(資料代)

4、講演:13:20~17:00

(1)大熊 孝 氏(新潟大学名誉教授)

「技術にも自治がある——日本人の伝統的自然観と水防技術」

(2)大橋 欣治 氏(元農水省北陸農政局長)

「地震、雷、火事、親父」考

5、懇親会 参加費:4000円

※参加申し込み:参加希望者は下記へご連絡下さい。

TEL:080-2061-4227(益永携帯) e-Mail:y.masunaga@ntc-c.co.jp

□ 目 次 □-----

<巻頭言> グローバリズムとインターナショナリズム 渡邊 博

<お知らせ 1> 山崎農業研究所所報『耕 No.139』発行されました

<会員著書案内>

<編集後記> 人工知能の時代来るか

<巻頭言> グローバリズムとインターナショナリズム

英国の EU 離脱やトランプ大統領誕生を契機に、グローバリズムの衰退とナショナリズムや保護主義の台頭を危惧する論調がいたるところで見られる。この場合のグローバリズムはポジティブな印象を与えるが、新自由主義に代表されるように負のイメージも強い。

グローバリズムは国際主義と訳すことができるが、この言葉が広がる前には、主としてインターナショナリズムが国際主義の意味で用いられてきた。そこで、この 2 つの言葉を比較することで「国際主義」とは何かを再考してみたい。

インターナショナリズムは国家や民族の存在を肯定し、それぞれの自治を尊重しつつ、国際協調を図るという概念で使われることが多い。これに対してグローバリズムは言葉自体が新しいこともあり明確な定義がしづらいが、実際に使われている場面からは、国家や民族を否定した超国家主義という印象がある。超国家主義は、状況によっては植民地主義や帝国主義に通じる概念でもある。

インターナショナリズムとグローバリズムの違いは、国家・民族の自治権を尊重した国際協調主義か、それらを否定した超国家的国際主義かの違いであると言ってよいだろう。しかし、それでは何故グローバリズムが時としてプラスイメージでも使われることがあるのだろうか。

これには EU の成り立ちが大いに関係しているのではないかと思う。2 度の世界大戦を経験したヨーロッパでは、戦争回避を目的とした欧州経済共同体が 1951 年に発足し、現在の EU にその思想が受け継がれている。平和の実現という高邁な思想を軸に創設された欧州共同体であるが、欧州合衆国、すなわち欧州内での超国家主義的な連合体を創るという、かなり拙速な政策が陰を落としている。

アメリカ合衆国でさえ、少し前までは州を越えた銀行業務を禁止していたほど自治の重要性が認識されていたのだ。平和の実現とはいえ、超国家主義とい

う点では EU はグローバリズムの典型なのである。言葉も歴史・文化も大いに異なる民族・国家の自治権を制限した共同体は、ドイツのような強者にとってのみ都合のよい連合体になってしまう。TPP が実現していれば、全く同じようなことが起きるであろうことは想像に難くない。

トランプのアメリカ・ファーストの姿勢はマスコミが言うように反グローバリズムなのであろうか。グローバリズムは国際主義ではなく、他国の自治権を軽視した超国家主義であると認識すれば、トランプの言うアメリカ・ファーストはまさにグローバリズムそのものではないか。TPP か 2 国間協議かは単に手法の違いであり、思想ではないのである。

英国の EU 離脱をポピュリズムによる選択だと簡単に切り捨てるのも危険である。EU が本来の高邁な思想を堅持するのであれば、グローバリズムではなく、インターナショナリズムに立ち返るべきではないかと思うが、どうであろうか。

渡邊 博

山崎農業研究所事務局長

yamazaki@yamazaki-i.org

<お知らせ 1> 山崎農業研究所所報『耕 No.139』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.139』が発行されました。

ご希望の方には雑誌を頒布いたします。

yamazaki@yamazaki-i.org

までご連絡ください。

《土と太陽と》(巻頭言)

いまなぜベーシックインカムか

——これからの「百姓的」生き方を支える政策提言◎白崎一裕

[第 154 回定例研究会]

グローバリゼーションから「農本化」としてのローカリゼーションへ◎関 曠野

[第 42 回研究所総会・第 40 回山崎記念農業賞]

総会挨拶◎小泉浩郎

第 40 回山崎記念農業賞贈呈式（栃木県益子町・(株)川田農園）

選考委員報告◎渡邊 博

お祝いの言葉◎加藤敏之／松本 謙

受賞者挨拶◎川田 修

■総会記念フォーラム：

「こだわり」で結び合う農と食—農園と厨房をつなぐ川田農園の挑戦

I 解題：川田農園が教える食と流通◎小泉浩郎

II 我が国における有機農業の動向◎家常 高

III 栃木県の 6 次産業化振興と川田農園の特徴◎小林俊夫

IV 「農園」から「厨房」まで◎川田 修

参加者の声◎若林祥子／内田空美子／丸山紀之／堀 泰史

[特別対談]

川田農園の今と明日を語る◎松本 謙×小泉浩郎

〈連載〉“生きもの語り”の世界から(10)

なぜ日本人は、「天地自然」に惹かれるのか／宇根 豊

会員著書案内

安富六郎著『武蔵野・江戸を潤した多摩川——多摩川・上水徒歩思考』

（農文協、199 ページ、定価 1700 円〈税別〉）

<http://www.amazon.co.jp/dp/4540142631>

山崎農研 HP に関連記事を掲載

玉川上水の奇跡「ひとくい川」（第 3 話）連載 安富六郎 著

http://www.yamazaki-i.org/img/Hitokui_No3.pdf 第 3 話

http://www.yamazaki-i.org/img/Hitokui_No2.pdf 第 2 話

http://www.yamazaki-i.org/img/Hitokui_No1.pdf 第 1 話

<編集後記> 人工知能の時代来るか

「人工知能=AI」という言葉をメディアで見たり聞いたりしない日はない。

「人工知能が発展すればいまある仕事の相当部分がなくなる」という悲観的な声もあれば、「人工知能で労働から解放される」あるいは「人工知能の発達によって経済成長が実現される」のような楽天的な見通しもある。

先日、気の置けない友人たちとの集まりでもこの人工知能が話題になった。話のとっかかりは、自分のパソコンやスマホの画面に示される、インターネットを介しての書籍の「オススメ」がかなりの確だということ。おおげさに言えば「怖いくらい」あててくるのだと。

だが、人口知能には得手不得手があるのではないか。合理的に思考を積み上げるのは得意かもしれないが、そこからズレる、はみ出るような思考は苦手、いや、合理的な思考＝ゴールを設定し、それに向けての解決を求めることにしか向かないのではないだろうか。そのいっぽうで、人口知能を推進する側には「合理的」とはそもそも何を意味するのか、それがどんな影響を及ぼすかという問いの意識は希薄に見える。

この会の参加者の一人は、数十年も放置されていた耕作放棄水田の復元に取り組んでいるという。そこに必要な情報や知識を得るには人工知能も助けになるかもしれない。しかし、できるかどうかわからないことを、やっても無駄だとほとんどのひとが思うことを、関係者の説得も含めて「あえて」やろうとするのは、人間にしかできないのではないか。

人間にしかできないであろうもっと大事な、素敵なことはほかにもある。それは、笑うということ、ユーモアの精神である。この会もまた笑いの渦になんどもつつまれた。しかしその笑いのネタは、たぶんほかの人が聞いても、面白くもなんともないだろう、たわいのないことばかりである。

そもそも、いくつもある話題のなかで「人工知能」について語り合おうとしたことも、それが結果的に中途半端になってしまっても（たしかどうでもよいオヤジギャクでオチがついた）、それでヨシとしするのは、その場に集う人間が決めることだ。いや、決めるという強い言葉よりも、なんとなく諒解し合うといったほうがよいかもしれない。

おそらくは、さまざまな部門で人工知能の導入はすすんでいくのだろう。しかしわたしは、それってどうなの？ と言葉をやりとりできる人と人との関係のほうが大それたと思うのだ。

2017年02月01日

山崎農業研究所会員・田口 均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売
『自給再考——グローバリゼーションの次は何か』
(発売：2008/11 定価：1,575 円)

http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/

たくさんのお書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん (文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授)
グローバルの次は何? ～卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん (大地を守る会)

ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”
「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん (長野県農業大学校教授、執筆者)

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん (拓殖大学政経学部)

ブログ：代替案 書評：『自給再考——グローバリゼーションの次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん (イラストレーター・ライター)

ブログ：囲炉裏暖炉のある家 tortoise+lotus studio 「書評『自給再考』

<http://iroridanro.net/?p=15533>

◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rircl.jp/shiryo.htm>

◎日本農業新聞／書評

(2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優)

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎小谷敏さん (大妻女子大学)

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ (2009/01/31)

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん ((株) 共に生きるために)

月刊とちぎV ネットボランティア情報 vol.158 / しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎塩見直紀さん (半農半X 研究所、執筆者)

ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！

立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

http://www.csj.jp/learned-society/check/new_but/jisx0208-sjis.html

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回 397号の締め切りは02月13日、発行は02月16日の予定です。

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第396号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2017.02.02 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

*****ここまで『電子耕』*****